
FANTASY OF BLOOD

戯言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FANTASY OF BLOOD

【Zマーク】

Z1289F

【作者名】

戯言

【あらすじ】

一人で荒くれの魔物を束ねる魔王。完全無敗の天才勇者。この二人が出会うとき、世にも奇妙な冒険ファンタジーが始まる……！短編小説の「魔王の一日」に加えて、連載化してみました！

トータル・魔王の一冊（前書き）

可愛い魔王は、お好きですか？

データ1：魔王の一日

朝。

目を覚ました魔王は、まず髪をとかす。
出来るだけツンツンに髪を立たせる。

だがしかし、整髪料の類は一切使わない。

それは、髪が痛むからなどの理由ではなく、単に魔王のポリシーである。

そう、魔王は自分に厳しくなければならない。

それは、荒くれ者を束ねる魔王という立場にあるものとしては当然の事である。

城下町には、麻薬の密売人やギャングの類がはびこっている。

それも、一般に、人間と呼ばれる種族のものよりも、一回りも二回りも三回りもでかく、腕っ節も人間と比較にならないくらい強い。火を吐いたり、時間をとめたりするような特殊能力タイプもいる。魔王は日々肉体と精神を鍛え、そのような魔物を束ねなければならない。

城下町の魔物が不祥事を起こした場合は、魔王自ら制裁に行かねばならない。

魔王の一日は、毎日が波乱万丈、ドッキドキなのである。

髪をとかし終えた魔王は、朝食を食べる前に事務の仕事をする。
ほとんどは印を押すだけのものだが、中には署名をしなければならないものもある。

しかも、書類をよく見ずに印を押してしまうと、訳のわからないものに騙されてしまうこともある。以前は、危なく城中のメイドや執

事、下働きの者全員にブルー イディスクプレーヤーを買つてやるところだった。事務仕事に関して適当だった魔王も、このときから書類によく手を通すことにした。

やつと事務仕事を終えた魔王は、朝食を食べるために食堂へ向かう。広い城の中では、何処へ行くにも一苦労である。十分ほど歩いてやつと食堂へ辿り着く。

魔王の朝食はいつもパンである。

おかげは田玉焼きやハム、ワインナーなど、出来るだけ庶民と同じものを食べるようにしている。魔王は、自分だけいい暮らしをしては、町の庶民から非難を浴びると考え、貧相な食事をわざとしているのである。

食事を終えた魔王は、いよいよ城下町の視察に入る。

身支度を整え、城の裏門から外に出る。

魔王の服装は、一見魔王のそれとはわからない服装である。はつきり言って、ボロである。

それは、自分の身分を隠すためであり、ありのままの城下町を見て回るためである。

自分が魔王だと分かると、自分をよく見せようと食事屋でハンバーグを多くしたり、クリーミーソーダのアイスを多く乗せたりした輩がいた。

だから、魔王はそれを防ぐため、身分を隠しているのである。

城の外に出た魔王は、城下町を颯爽と歩く。

たまに自分を魔王と気付く者もいるが、そのような者は口止め料を払い、黙らせる。

それでも黙らない奴は、制裁を与える。

魔王は強い。
かなり強い。

魔界で一番強い。

年に一回、魔王に挑戦する大会のようなものが開かれることがある。

その大会で、魔王は負けたことが無い。

何故そんなに強いのかというと、魔王は珍しい能力を持っているからである。

しかも、大抵の者は、ひとつものに関して恐ろしい力を発揮する。怪力を持つものは直接的な暴力で。

特殊能力を持つものは、その能力を使っての戦闘を得意とする。つまり、怪力を持つものは特殊能力が弱いが、持たないもの。特殊能力を持つものは、その能力を磨くために、筋肉を鍛えることをせず、能力をさらに高みへと持っていく。

しかし、魔王は違う。

万能タイプなのである。

身体もがっちり鍛えているし、能力もかなり高いレベルのものを使える。

そして、その能力とは、一度誰かの能力を見ただけで自分の能力として使えるという「アイシーケ『ぬすみみ』」である。

はつきり言って卑怯な能力だ。

が、しかし、かなり役に立つ能力である。

魔王は、戦うたびに強くなる。

相手の能力を盗み、魔王は強くなる。

魔王が戦つた相手は数え切れないほどである。

その戦つた者達からいちいち特殊能力を盗んでいるので、魔王は自分でもどんな能力を盗んだのか忘れかけている。

たまに知らずの内に能力を発揮して、自分がこんな能力を持つていたのかと驚くこともしばしば。

困ったものである。

魔王は一軒の酒場に入る。

城下町のはずれのほうにある、古びた小ぢんまりとした酒場。この酒場は、今年で68歳になるおじいさんが経営している。

魔王はカウンターの席に座り、ジンジャーエールを頼む。

これでも魔王は仕事中なので、酒は飲まない。

というか、この魔王は酒が飲めないのである。

魔王がちびちびジンジャーエールを飲んでいると、酒場のドアが乱暴に開かれる。

三人の屈強な魔物が入ってくる。

入ってきた魔物は、周りの客を跳ね飛ばし、奥のテーブルへ座る。最初からいた客は、驚いてほとんどが帰ってしまった。

席についた魔物は、大声で話し始める。

注文もせず、テーブルに足を乗っけて、である。

おじいさんは魔物を注意しに行く。

魔物が怒り出した。

おじいさんが怒り出した。

魔物がおじいさんを床へ突き飛ばした。

おじいさんが魔物を酒場の外へ吹き飛ばした。

おじいさんの勝利、である。

実はこのおじいさん、魔王の師匠である。

魔王は、剣と能力のノウハウ、戦闘の知恵などをこのおじいさんから習つた。

おじいさんがいなければ、今の魔王はない。

それくらいに恩人なのである。

そして、おじいさんはこの日の前で座つてジンジャーエールを飲んでいるのが魔王だということを知つていて、城下町で数少ない者の一人である。

おじいさんは、魔王にそつと微笑みかけ、ジンジャーエールのおかわりを渡す。

魔王は黙つてそれを受け取る。

ジンジャー・エールを飲み終えた魔王は、おじいさんに礼を告げ、お金を置いてその酒場を後にした。

魔王が、そろそろ城に戻ろうかと思案していたとき、事件は起つた。

通りの目の前の銀行から、爆発音が聞こえてきたのである。魔王は、やれやれといった表情で銀行の中へ入つて行く。

中は大惨事だつた。

植木が倒され、机はひっくり返され、人がごみのよつに散らばつている。

その中で、十数人の人質と、今回の強盗の犯人の男達がいる。

男達の数、ざつと7人。

魔王は激怒した。

よくも俺の国の人間を殺してくれたな。覚悟しやがれ。

手前エラに明日はないと思え。

そう言つて、魔王はそいつ等に飛び掛つた。

0・8秒。

魔王は一人目に飛び掛り、首を掴んで180度ひねる。

男は悲鳴を上げる間も無く、息絶えた。

1・7秒。

ここで魔王は特殊能力を使つ。

目があつた相手を石にする「ゴーゴン《いしがため》」。

男三人を一気に石にする。

3秒。

男二人を一気に殴り倒す。

あつという間も無く、強盗は残り一人になつた。

最後の一人は、いかにも強そうな屈強な男だった。

男はさも自信ありげに、魔王に向かつてかかつてこい、と叫団した。

そして、戦いの火蓋は切つて落とされる。

ぶつかり合う二人、にらみ合う二人。

だんだん傷が増えていく・・・、わけはなかつた。

戦いは一瞬で魔王の勝利に終わつた。

男が雄叫びを上げる間もないほどに、勝負は一瞬でついていた。

男の首が中を舞い、落ちると同時に魔王は背を向け、銀行を後にした。

一仕事終え城に戻つた魔王は、メイドからの出迎えを受けながら中に入る。

あれだけの戦闘をした後でも、疲労はまったく見えない。

魔王は執務室に入り、事務の仕事をする。

今度の事務は、自分で書類を作らねばならない。

隣国との友好関係を立て直そと、話し合いの場を設けねばと思案する。

ある程度の事務仕事を終え、魔王は夕食を摂る。

夕食の献立は、さばの塩焼きであつた。

やはり夜も、庶民とできるだけ近い食事を摂る。

魔王の好きな食べ物はハンバーグだが、なかなか作つてはもらえない。

良い子にしていれば作つてもらえる事を魔王は知つていて。

だから今日も魔王は国をまとめるための労力を惜しまない。

魔王が食事を終えると、時はすでに九時を回つていた。

良い子は寝る時間、である。

だから、魔王は眠りにつく。

明日の夕食はハンバーグであることを願つて。

12歳の少年、魔王は眠りにつく。

明日には、国が平和である事を願つて。

データ1：魔王の一曰（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

僕が前に書いた、「魔王の一曰」を連載化してみました。
次回に魔王のライバル！？勇者が現れる予定です。
期待していくくださいな。

感想、意見、よろしくお願ひしますー。

データ2・勇者の決意（前書き）

勇者登場！

データ2・勇者の決意

朝。

勇者は髪を梳かす。

流れるような金髪を、一生懸命櫛で撫で付ける。

勇者が一番、身体のうちに気に入っているパートだった。

ひとしきり髪を整え終わると、鎧を着け始める。

真っ赤な鎧を身体に纏い、背中に大剣を背負い、準備は完了だ。

宿屋のお姉さんに挨拶をしてから、外に出る。

この村はのどかだが、つい一昨日まで魔物が出没していた。が、魔王の城に行くまでの道程、この村を通りかかった勇者は、気まぐれに魔物を退治し、この村に平和を取り戻した。

勇者は、刺激を求めて旅をしていた。

より強い奴と戦いたい、その一心で旅に出た。

初めの頃は、青いブニブニした生き物ばかり、もしくはちょっと強めの人型豚みたいな敵ばかりだった。

退屈だった。

勇者にとって、そんなモンスターはアウトオブ眼中だった。

七歳から旅をしている勇者は、旅を始めた頃から完全無敗だ。

筋肉は、傍から見ればそれほど無いと思えるが、その実、鍛え上げられていた。

引き締まった体は、何者も寄せ付けないオーラを放っている。

小柄なのにもかかわらず、大人の身長の1・5倍もあるような大剣

を自由自在に振り回す様は、常人離れしすぎて人間ではない、とまで言う人がいるくらいである。

まるで、鬼神のようだ、と。

そんな勇者は、ある村で気になる噂を耳にした。

ここから北の最果ての方にいくと、魔物だけの国があるという。そして、そんな荒くれ者の魔物たちを一人で仕切っている魔王がいるらしい。

ここまでならありえる話だ。

しかし、その魔王というのが。

12歳の少年だというのだ。

面白い。

勇者は思つた。

わずか12歳で魔物を束ねるとは、驚愕の事実だ。

そして勇者は決断した。

その魔王は、俺が狩る、と。

人間だろうが少年だろうが関係ない。

魔物を一人で束ねる、そんな強い奴と戦つてみたい。

そして勇者は、魔物の国に行く決意をした。

そこから三年。

あと五日も歩けば魔物の国に着く。

だが、ここからでも見えた。

魔王の城が。

それくらいに巨大だつたのだ。

てつぺんは既に雲に隠れている。

こんなに大きい城は、生まれて始めて見た、と。

勇者は、心底驚愕した。

だが、ここで尻込みしては後が続かない。

勇者は堂々と、歩き続けた。

四日後。

魔物の国前についた。

途中で胸の高鳴りを押さえつけられず、全速力で走つてしまつたので、予定より早く着いてしまつた。

最初から勇者は、やる気満々だつた。
門を正面から突破する気満々だつた。

しかし、あつさりと門番は勇者を通しててくれた。
しかも笑顔で。

心底拍子抜けしながらも、快く通してくれた門番モンスターに礼を
言い、国にはいつていつた。

国の中は、いかついモンスターが沢山いた。

だが、荒れているわけではなく、豪快な町だった。

通りを見てまわりながら、城を手指す。

しばらく歩いて、ふと勇者は足をとめる。

魔王の、城だった。

データ2：勇者の決意（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

勇者がでした。

勇者です、勇者。

ファンタジーの定番です。

これから展開にこうご期待！

感想、意見、よろしくお願ひしますー。

データ3・顔合わせ（前書き）

だいぶ更新遅れていますね…。

データ3・顔合わせ

魔王は退屈していた。

幼い魔王は、飽きっぽい性格だ。

毎日の町の見回りにも飽き、事務の仕事もしたくない。

といふことで、見回りでなく、城下に遊びに来たのだった。

あまり顔が知られていない魔王は、変装せずに出来歩いても、さして大きな騒動は起きない。たまに気付く輩に制裁を加えるだけだ。

何をするでもなくただ歩いていると、城下の一角が騒がしい事に気付いた。

何事かと様子を見に行くと、いつもなら魔物ばかりで賑わっている武器屋に人間がいることを発見した。

背中に大剣を背負い、金色の鎧をまとつた……、

自分と同じくらいの年齢の勇者を。

勇者のくせに丑つきが悪く、今時流行らないロン毛の少年だった。

魔王は感激した。

昔から自分の境遇を嘆き、こんな能力を持つてしまった自分を呪つた。

しかし、魔王はある時知つた。

自分と同じように、幼い歳から勇者になることを強制させられた少年が居たことを。

魔王は、その勇者に常々会いたいと考えていた。

しかし相手は勇者、下手に魔物の部下を向かわせると返り討ちにあう恐れがある。

魔王自らが、勇者の元に出向く訳にも行かず、半ば諦めかけていたのだが。

まさか、こんなチャンスが到来しようとは思わなかつた魔王であつた。

武器屋を取り囲む魔物を搔き分け、勇者に近づく。

勇者は、魔物に取り囲まれているにも関わらず、随分と堂々とした、とこつかふてぶてしい態度であつた。

魔王はますます勇者を気に入り、城に招待しようと決める。そうと決まれば、迷わず行動を開始する魔王。勇者に駆け足で近づき、肩に手を掛ける。

一瞬勇者は驚き、訝しげな視線を魔王に送つたが、同年代の子供と知ると少し興味を示し始めた。そこで魔王はとどめの一言。

自分が魔王であることを勇者に耳打ちする。

勇者の目つきが変わり、一瞬で剣呑なものへと変わる。

町の真ん中であるにも関わらず、背中に掛けた大剣を抜き、魔王に構える。

魔王は即座に臨戦態勢。

被っていたマントを脱ぎ捨て、両手をぶらぶらとたらし、自然体で立つ。

一見なんの構えもしていないように見えるが、この姿勢が一番、どんな態勢でも柔軟に対応できる、というのが魔王の持論である。

はじめに動きを見せたのは、勇者であった。

いつもなら、こんな軽率な動きはしなかつただろうが、今は魔王と対峙している状況であり、冷静な判断力を失っていたということもある。

兎にも角にも、その行動は勇者という代名詞には相応しくない動きだつたと言える。

魔王もいつもなら、勇者の、不自然なまでに軽率な動きに付き合い、肉弾戦を繰り広げるだろうが、今の魔王も、昔から気になっていた勇者が目の前に存在することに、軽い興奮を覚えていたのだろう、そんなことをする余裕はなかつた。

勇者に向かつて石化の魔眼を使用するという暴挙にでた。

結局、最終的には不自然な格好の勇者の石像を抱えて、城までの道をてくてく歩く魔王。

そんな間の抜けた情景が、城下で見かけられたこととなつた。

魔王は、猛烈に後悔していた。

勇者を説得してつれてくれれば、ここまで悪い印象は与えなかつただらう。

先ほどから勇者は、自分とは一言も口を聞いてくれない。

魔王は溜め息を吐きつつ、無言で勇者を眺めるのだった。

勇者はかなり焦っていた。

傍目から見れば、単に機嫌が悪そうに見えるだけかも知れないが、勇者は焦っていた。

先ほどから魔王が話しかけてくるが、それすらも耳に入らないほどに焦っていた。

それはそうだろう。

何せ、突然魔王とのバトルになり、気がついたら魔王と晚餐の席に向かい合つて座っている。

魔王は、突然とはいえ自分に勝つた男だ。

一応平静を装つてはいるが、内心気が気ではない。

魔王には、勇者の考えていることがなんとなく分かつてきた。表面上は至極正常なもの、額から脂汗がにじみ出でている。なんとなくだが、勇者は自分が嫌いではないことを感じていた。

勇者は驚いていた。

魔王の顔に、安堵と親愛の情が見て取れたからである。

「コイツは実は敵ではないのか？」

ふと、そう思えた途端、勇者の身体は若干軽くなつた。

魔王は、勇者の身体から緊張が少し解れたのを見て、こう切り出した。

実は、僕は君をずっと探していたんだ。

勇者は驚いた。

いきなり何を言い出すのかコイツは。

一体何故、コイツは俺を探していたというのか。

勇者はその疑問を魔王にぶつける。

魔王は、自分と同じくらいの年の勇者の話を聞き、昔からあつてみたいと思っていたことを話した。

勇者も、自分はお前に会いに来たのだ、と明かし、両脺とも顔を赤らめる。

その後、会話も晚餐もつがなく進行し、積もる話もあるであろう二人は、一晩中飲み明かした。

……ジンジャーエールで。

こうして、最年少魔王と最年少勇者は、初顔合わせを少しづぎくしかしながらも終えたのだった。

データ3：顔合わせ（後書き）

乱筆乱文誠に失礼。

ほんつとーにすいません…。

受験生なもので、小説を書ける時間も少なくなるばかり…。もう受
験なんかいやだあ…！

そんなこんなで更新があまり出来ないので、首を長くして待つ
ていただけれど、大変嬉しく思います、ハイ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1289f/>

FANTASY OF BLOOD

2010年10月19日02時31分発行